スコットランド演劇の展開 2009

ブレア労働党政権下、スコットランドは国民投票を経て、英連邦のなかにありながらも、独自の議会、徴税権、教育制度をもつ「半独立」を選択した。1999年のスコットランド議会の誕生から 10 年、スコットランド演劇もこの変化のなかで「独自性」を構築しつつある。とりわけ、大きな契機となったのは、2006 年 2 月の「スコットランド国立劇場」の船出である。もとより歴史的にイングランドに対する強い敵愾心をもつスコットランドにとって、独自の国立劇場を持つことは悲願に近いものがあった。70 年代から何度も議論やキャンペーンが繰り返されてきたが、実現の契機は半独立の選択を待たなければならなかった。2000 年、演劇人たちを中心に「ＳＮＴ独立作業部会」が設置され、スコットランドが築くべく国立劇場の青写真が議論され、2006 年の船出へとつながった。

興味深いのは、この独立作業部会の提言から構築されたスコットランド国立劇場のプロフィールである。エディンバラ、グラスゴーといった都市部ローランド、山間部のハイランド、そしてシェットトランドやオークニーへとつながる島嶼部…広大で多様な国土をかんがみて、拠点となるハコとしての劇場を建設しないことを選んだことである。看板一つ掲げて、街から街へ、村から村へ、そして劇場から劇場へと旅するナショナル・シアターなのである。しかも「ナショナル」という権威をもって、既存の劇団や劇場への資金や人材を搾取しないために、ほとんどの公演が地域劇場・劇団との「共同」で制作されていることも特筆すべきだろう。そのプログラムは都市部を巡演する大規模なものから、小規模なスタジオでの上演、児童青少年演劇、コミュニティプロジェクトにまで及ぶ。設立からわずか数年しか経ていないが、ロンドンでの公演も増え、スコットランド国立劇場がスコットランドのみならず、「イギリス演劇」全体にも大きな影響を与える存在に育った。

2006 年度には、イラク戦争に従軍したスコットランドの兵士たちへのインタビューをベースにしたグレゴリー・バーク(Gregory Burke)の『ブラックウォッチ(Black Watch)』（演出ジョン・ティファニー）が衝撃をもたらし、ウエストエンド公演、さらにはアメリカ、カナダ、ニュージーランド等への海外公演にまでつながった。また、2007 年のコリン・ティーバン(Colin Teevan)翻案の『ペール・ギュント(Peer Gynt)』（演出ドミニク・ヒル、ダンディ・レップ劇場との共同制作）は 2007－8 年度のスコットランド演劇批評家賞を総なめにしたことは記憶に新しい。

スコットランド演劇の主役は、あえてスコットランドにとどまって仕事を続ける劇作家である。もとよりエディンバラのトラバース劇場が新作上演に特化した劇場として、北のロイヤル・コート劇場とも、プライベートな国立劇場とも呼ばれる存在だが、そこに国立劇場が参入し、つねに新作が生まれる環境がさらに醸造されて、活況を示している。もちろん、スコットランド芸術評議会の強い政策的意志、2004 年に発足した新人劇作家の育成を目的とした団体プレイライツ・スタジオ・スコットランドの存在も大きな役割を果たしている。いま、「スコットランド人」としてのアイデンティティが戯曲に結集されているのである。

ご当地ドラマの典型で、2007 年初演、2009 年にも再演されたヒット作は、80 年代末から人気を誇るスコットランド出身のロック・グループ The Proclaimers の音楽にのせた、スティーブン・グリーンホーン（Stephen Greenhorn）作の『サンシャイン・オン・リース（Sunshine on Leith）』（演出ジェームス・ブライニング、制作ダンディ・レップ。2007 年度ＴＭＡベスト新作ミュージカル賞、最優

秀助演俳優賞などを受賞）である。かつて劇作家・演出家ジョン・マックグラース(John McGrath)率いた劇団７：８４スコットランドが音楽入りの民衆演劇をもって山間地をもツアーしたように、スコットランド人のアイデンティティを構築するものに、少しばかり泥くさい労働者性と音楽性がある。それを見事に融合した作品として、熱狂的に受け入れられた。

一方で、スタイリッシュで、国際性に富んだ作品を創造する劇作家たちも多い。ボーダーを超えて、イングランドでも人気を誇る劇作家としては、３Ｄと呼ばれる 30 代から 40 代のディヴィッド･グレイグ(David Greig)、ディヴィッド・ハロワー(David Harrower)、ダグラス・マックスウェル(Douglas Maxwell)がいる。ディヴィッド・ハロワーの『ブラックバード(Blackbird)』は日本でも翻訳上演されている。とりわけ、毎年 3～4 本の異なるスタイルをもった新作や翻案をコンスタントに発表し続けているディヴィッド･グレイグのエネルギーには驚かされるものがある。2009 年には音楽劇『ミッドサマーMidsummer』を発表、書くだけでなく、演出にも携わった。

2009 年、劇作家のなかでも最も気を吐いたのは、トラバース劇場とエディンバラ国際演劇祭の共同製作『最後の魔女(The Last Witch)』、スコットランド国立劇場の『ベルナルド・アルバの家』の翻案という二大プロジェクトに携わったローナ･マンロー(Rona Munro)だろう。スコットランドを代表する女流劇作家のひとりである。

『最後の魔女』（演出ドミニク・ヒル）は、18 世紀の北スコットランド、最後の魔女狩りの犠牲者ジャネット・ホーンとその娘を中心に描いた。幻想的なイメージと言葉のぶつかりあいと身体性、主役を演じたキャサリン・ホウデンの怪演もあって、単なる歴史劇に終わらない、現代を問う佳作となった。すでに 2011 年春の香港ツアーが決定しているという。

『ベルナルド・アルバの家』（演出ジョン・ティファニー）は、言うまでもなくロルカの名作だが、設定を現代のグラスゴーに移した。暑く、乾いた、閉ざされた田舎の村のスペインのイメージからはまさに正反対、じめじめと雨が降り続けるグラスゴーのイーストエンドに住むギャング一家に姿を変えた。スタイルはファッショナブルで洗練されたものとなり、母親の束縛も今日的な意味に変えられ、若い観客を強く惹きつけた。

新作上演の家として、そしてエディンバラ・フリンジ演劇祭の拠点劇場としてのトラバース劇場の役割は、国立劇場が誕生したのちにあっても多大なものがある。ロンドンのロイヤル・コート劇場、ブッシュ劇場、ハムステッド劇場などと、トラバース劇場の「差異」の一つは、まさにスコットランドへのこだわりであるが、同時に、大御所から、いま最も売れている劇作家たち、また新人たちがコンスタントにリーディングという形で working in progress の作品を発表し続けていることである。2009 年だけをみても、先の３Ｄの３人も、ローナ・マンローもリーディングに参加した。必ずしも観客数の多くないスコットランドで、ランチタイムのリーディング上演が広く受け入れられていることの意味は小さくない。

イギリス演劇と言えば、ときに俳優が首から上だけで演技すると揶揄されるように、言葉の演劇が主流で、パフォーマンス系、あるいはアヴァンギャルドという言葉はあまりなじみがない。だが、つねにイングランドを超えてヨーロッパ大陸への視座を持ち、長年にわたるエディンバラ国際演劇祭のもたらした恩恵もあって、スコットランド演劇に接していると、多分にパフォーマンス系、あるいはアヴァンギャルド的な作品としばしばお目にかかる。

2009 年に上演されたユニークな作品としては、パメラ・カーター(Pamela Carter)の『性についての論争（An Argument about Sex）』（untitled

projects、*Tramway*、*トラバース共同製作*）がある。マリヴォーの『いさかい』への若い中国系スコットランド人による挑発的な応答だが、驚かされた。3幕構成で、現代のオフィスでの男女の会話劇として第一幕は進行するが、一幕が終わると観客は異なるスペースに案内される。筆者はトラバース劇場で観たが、すべてを取っ払った広大な劇場スペースに芝生が敷き詰められ、観客はランダムに置かれた椅子に腰かけ、第二幕を待つことになる。第二幕で繰り広げられるのは、あたかもエデンの園の光景。性を意識したことのない無垢な二組の男と女、その管理者たち、そして、第一幕の二人の男女たちも闖入して…。そして、第三幕は劇作家、演出家スチュアート・レイング、科学ジャーナリストのマット・リドレーとの議論の場が映像として投影される―決して成功作とはいえないが、演劇的試みとしての面白さに溢れていた。

2010 年もまた多くの新作上演が準備されている。故郷スコットランドへのこだわりと、泥くさい労働者性、国際性、そしてアヴァンギャルド…二極化してしまいそうな様々な要素を融合させながら、自分たちのアイデンティティを問いかける。実際のところ、まだまだイギリス演劇にのみこまれて独立して知られる存在ではないが、近い将来、アイルランド演劇に匹敵するほどの広がりを見せるのではないかと期待するものである。

中山夏織／Kaori Nakayama

社団法人国際演劇協会
Theatre Year-Book 2010: Theatre Abroad
「諸外国の演劇事情」所収